ふるさとわがまちづくり

八草自治区

◆「八草」のむかし～現在

八草町は、国道１５５号線沿いに細長く伸びた町で、北は瀬戸市に隣接しています。八草町の移り変わりを粕谷区長さんは次のように話してくれました。

「町は小高い山々に囲まれており、昔から田畑の収入が少なかったので、この山から取れる農作物などを瀬戸市までリヤカーで売りに行っていました。そして帰りに日用品の買物をするのが日課でした。

八草の山々は、地下資源の豊富な所で、大正の半ばから砂婆長石、木節粘土、珪砂などの採掘が行われてきました。

昭和40年、愛知工業大学の建設用地として来姓地内でブルドーザーによる整地作業中に発見されたことで、八草に古墳が出土したことが知られています。このあたりは通称、釜の前とも呼ばれていましたように古墳の多いところで、この時発見されたものだけで9基ありました。いずれも横穴式石室で、大きいものは長さ5メートルもあり、中から刀やツボ、装身具などが出ています。調べによると、今から1200年位前に築造された相当な有力者の墳墓ではないかと言われています。

また、この地には八草城がありました。国道155号線、大原口のバス停から100メートルほど東に入ったところに、その城跡が見られます。平安朝時代、藤原氏が栄えた頃から、粕谷氏や原田氏から那須、中條、阿部、小栗氏らが城主になったということです。今では、面影はなく井戸とやぐら跡が見られるだけです。

次に伝説についてもお話ししましょう。愛知工業大学（以下、愛工大といいます）から広見（現在の広幡町）へ通じる道の左手に椀貸池があります。この池にまつわる伝説は多く、昔むかし、池の主が椀を貸したので、この名ができたとのことです。村民が婚礼・仏事に必要な器の数を書いて堤の上に置くと翌日には必ず必要なものが並べられて貸してもらえたそうで、池には白龍様が住んでいると伝えられています。また椀貸池は雨乞いの言い伝えもありました。

日照りが続いたある日、みの笠をつけた若者や村の人達が、竹の筒に神酒を入れ、池の白龍様に捧げて参拝したところ、帰りにはポツンポツンと不思議に雨が降った・・・という話しです。椀貸池を見下ろす小山の頂にまつられる祭神の弁天様には白龍様も一緒に祭ってあります。

椀貸池は9．2アール、水深　6．1メートルで約25ヘクタールの田畑の灌漑池で、八草地区の名所の1つでもあります。

八草は、こうした歴史、伝説の多い町ですが、昭和41年、愛工大の開校により、当時、付近に商店などが建ち並び一躍繁華街ができ、目まぐるしい変化を見せてきました。

愛知環状鉄道　八草駅

特に、学生の下宿も数多くできたこともあり人口が急増し、従来からの147世帯を併せ、今では、昼間人口は6500人余り、夜間でも1700～1800人を数えています。

また、交通関係においても、昭和47年4月に開通した猿投グリーンロードのインターもあり、名古屋あるいは足助方面への交通がたいへん便利になりました。

昭和63年1月愛知環状鉄道の開通、八草駅からJR名古屋駅・JR岡崎駅へ直通で行くことができるようになりました。

平成17年3月には、日本国際博覧会「愛・地球博」が、隣接する長久手町・瀬戸市の2会場において、120を越える国々が参加し、6か月にわたり盛大に開催されました。

その開催に合わせリニモが開通し、八草駅と名古屋市営地下鉄藤ヶ丘駅が結ばれ、交通アクセスは素晴らしいものとなりました。

八草町は、豊田市の北の玄関口であり、自治区としても、地域内を整備し自然と調和した、安全・安心で住みやすいまちづくりを進めることが重要な課題ととらえています。そして今後も発展を続けていくことでしょう。

愛知工業大学

八草自治区データ

（H21．4現在）

設立：昭和４２年
世帯数：１４７世帯
　　：１４２世帯（昭和５１年）
組数：１０組
面積：４．９５３Ｋ㎡
自治区たより：
回覧：月１～２回
区費：年額10,000円
ちびっ子広場：
ふれあい広場：１箇所
防犯灯設置箇所：１５箇所
ごみステーション数：１箇所
小学校：大畑小学校区
自治区会館：八草町公民館